

50517

教科書文庫

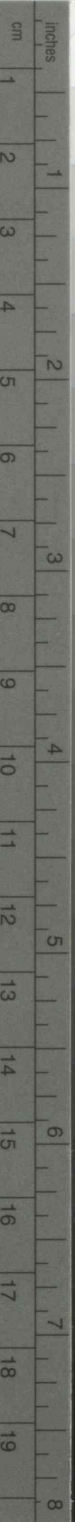
5
810
34-1947
20000 67134

Kodak Gray Scale



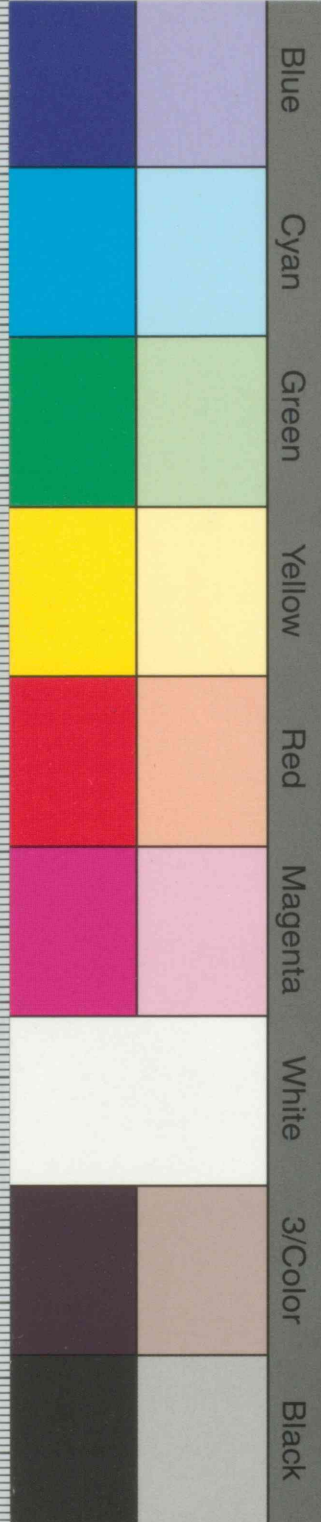
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3a
810
昭22



Handwritten Japanese characters: 菊

Handwritten number: 11





資料室

こ

く

こ

二



32

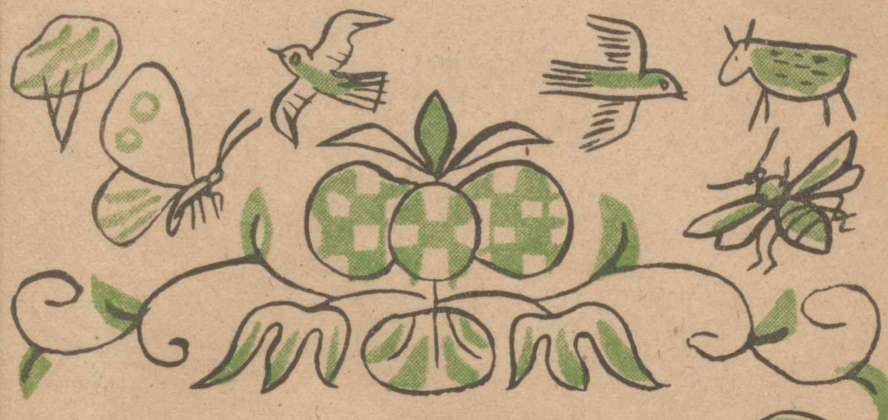
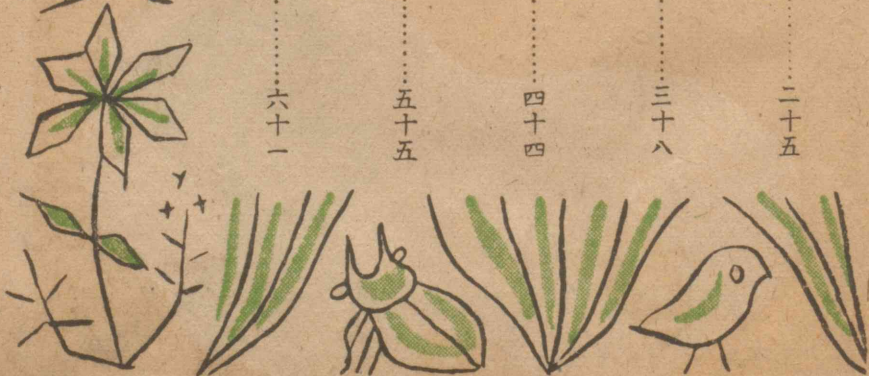
810

DB22





- 五 おはなし……………二十五
- 六 山びこ……………三十八
- 七 かげえ……………四十四
- 八 ゆめと つくえ……………五十五
- 九 春を むかえに……………六十一



- 一 「あ」の つく ことば……………四
- 二 えにっき……………十二
- 三 ことばあそび……………十六
- 四 先生……………二十一





「あのつくことば

(一)

「あのつくことばを、みんな  
であつめて みましよう。」

「あたま——足——あご——あさ——

ひ——あした——あそこ——」

「それから。」

「あぶら。」

「あめ。」

「ふる あめですか。 たべる

あめですか。」

「たべる あめです。」

「それから。」

「あまの川。」

「

「お友だちの なを かんがえ  
て、ごらんなきい。」

「あつしさん——あきらさん——」





「あきこさん——」

「あやこさん。」

「あおきさん——あんどうさん。」

「あかちゃん——あかんぼ。」

「よく かんがえて ごらんささい。まだ ありますよ。」

「あかい——あおい——あつまる——あそぶ——あさい——

——あまい——」

ここまで きた とき、とみこさんが、

「あとで。」

と いいました。

すると、まさおさんが、

「あのね。」

と いいました。

「よく おもいつきましたね。」

では、「あさ」という ことば

の つく、ものを、あつめて

みましょう。」

「あさがお——あさつゆ——あ

さかぜ——」

「あさばん——あさごはん——

あさおき——」

「」





よしこさんが、

「あさねぼう。」

と、へんなこえていったので、みんなわらいました。



(三)

つぎの日に、「い」のつくことばを あつ

めました。

それから、「う」のつくことばと、「え」のつくことばを あつめました。

おしまいには、「お」のつくことばを あつめました。

あつめたことばを、みんなかきとめて おきました。

(三)



先生が、それを ざらんになって、

「せっかく あつめたことばが、ごちゃごちゃになっ  
て います。なんとか して、そろえる ことは でき  
ませんか。」

と おたずねに なりました。

みんなは、いろいろ かんがえました。

ふみおさんは、



「人の など、 そうで ない ものとに、 わけたら いい  
と おもいます。」

と いいました。

はるこさんは、

「くさの など、 とりの など、 その ほかの ものとに、  
わけたら いいと おもいます。」

と いいました。

ただしさんは、

「目に みえる ものと、 みえない ものとに、 わけたら  
いいと おもいます。」

と いいました。

「では、 めいめいの かんがえどおりに、 わけて ごらん  
なさい。」

そこで、 みんなは、 小さな かみに、 ひとつひとつ  
とばを かきつけました。 そうして、 ひとりびとりの か  
んがえどおりに わけて みました。

わけて いる うちに、 その わけかたが、 いろいろに  
かわって いきました。

はじめは むずかしいと おもいましたが、 だんだん  
おもしろく なりました。



二 えにっき

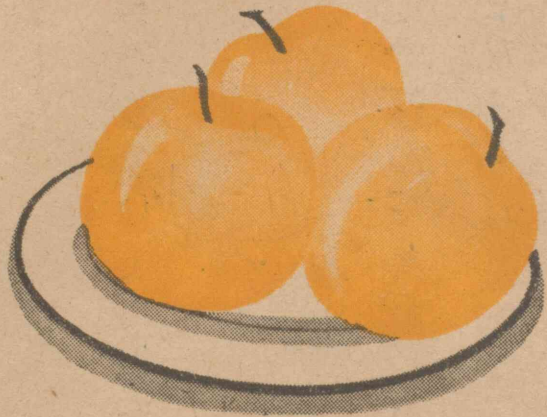
○  
木の、はを ならべて みま  
した。

かたちの にた ものを な

らべて みました。

ちがったのを ならべて みました。

いろいろ かえて ならべました。



○

おばさんの うちから、大きな

りんごを みつつ いただきました。

ひとつは まっかでしたが、ひと

つは、はんぶんだけ みどりいろを

して いました。

おさらに のせて かざりました。

○  
大あめが ふりました。



にわに 川が できました。  
あめが やんで、 にじが  
できました。

大きな にじでした。

○

しゃぼんだまを ふいて  
あそびました。

赤や 青や むらさきの

たまが できました。

ふたごも できました。

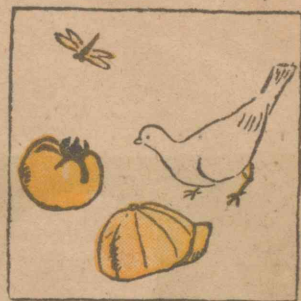
○



まんまるい お月さまが のぼりました。  
あんな 大きな、あかるい お月さまは、 どう したら  
えに かく ことが できるでしょう。







三 ことばあそび

(一)

ただおさんたちが、ことばあそびを しました。  
はじめに しりとりを しました。

ただおさん	みちこさん	まこさん	よしこさん
はと	とまと	とんぼ	ぼうし
しか	からす	すずめ	めだか
かめ	めじろ	—	ろばた

(二)

かんがえものをして あそびました。

「口から たべて、おなかから だす ものは なあに。」

「ぬれた きものを きて、かわくと ぬぐ ものは な

たい	いも	もち	—
ちくおんき	きしゃ	しゃしんや	やさい
いなご	ごま	まつ	つくえ





おわりに、ひとりが いった ことばから、おもいつい

(三)

「ねむって いても、みえる ものは なあに。」

「いる ときに いらなくて、 いらな い ときに いる  
ものは なあに。」

に、いちねんに 一べんしか ない ものは なあに。」

「いちにちに 二へん あるの」



あに。」

「上は 大みず、下は 大かじ、  
なあに。」

「一しゅうかんに 一ど、赤い  
きものを きる ものは な  
あに。」



た ことばを じゅんじゅんに つづけて、 あそびました。

川	ほし	おとうさん	まんど	かぜ	まり	よしこさん
さかな	よる	にいさん	ごむぐつ	ゆき	りんご	まことさん
ふね	ゆめ	ねえさん	くつした	あめ	かき	みちこさん
なみ	山	はな	おかあさん	かさ	からす	ただおさん

四 先生



「先生 大きな くもが すを かけて  
 いました。 しまいまで みて  
 いたいと おもいましたが、 かねが  
 なったので、 やめて きました。」

「先生、 ゆうがおが こんなに 大き  
 くなりました。」





「先生、はねのいたんだ大きなちようちよが、けさも、ゆりの花にきいていましたよ。」

○

「先生、たいへんです。だりやの花が、さきかけてしぼみました。みてください。」

「先生、わたしたち、もみじのはっぱで、いろはあそびをしました。よしこさんののは、『いろはにほしかないのに、わたくしのは、『いろはにほへ』と『までも』ありました。どうしてですか。」

「先生、すのおそうじを

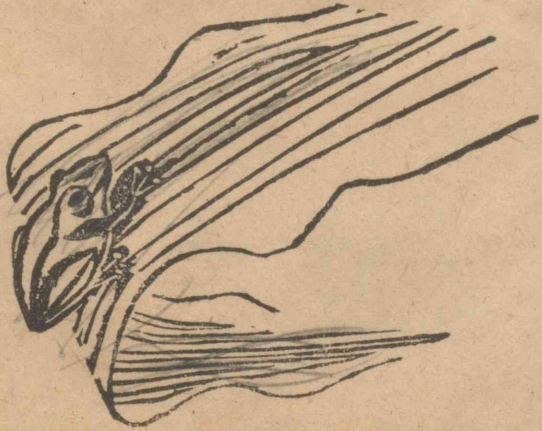
するので、はとをだいていたら、たいへんあついで、おもいました。びょうきではないでしょうか。」





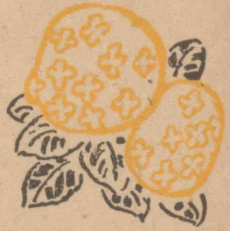
「先生、いもの はの つゆは、あれ、ただの水でしょうか。」

「先生、大きな あおがえるが、どう  
もろこしの はっぱに、じっと ぶ  
らさがって いました。あんまり  
いろが にて いるので、ほく、は  
じめは きが つきませんでした。」



「先生、でんせんに、つばめが たくさん とまって い  
ます。これから うんどうかいを するのですね。」

五 おはなし



じゅんばんに、おはなしを して きました。  
きょうは、いちろうさんと、さだおさんと、すみこさん  
と、くにおさんと、たけこさんと、この 五人の ばんで  
す。

(二)

いちろうさんの した おはなし。

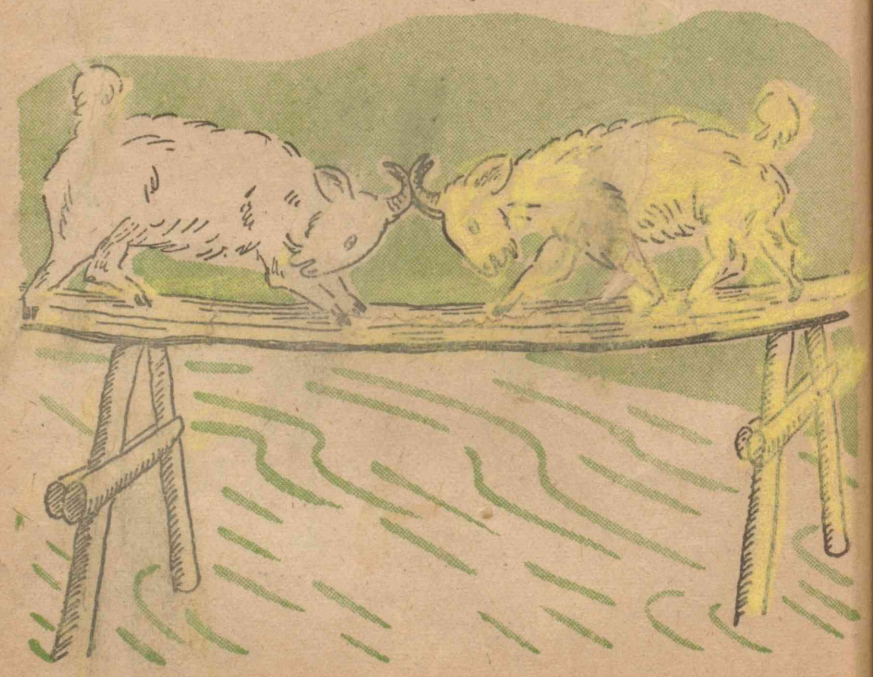


「ある ところに、川が ありました。  
くつが ながれて ききました。  
きゅうりが ながれて ききました。  
きゅうりが、くつの 中にはいりました。  
『きゅうくつ きゅうくつ。』  
と いいました。」

(三)

さだおさんの した おはなし。  
「せまい はしが ありました。  
二ひきの やぎが、その  
はしの まん中で あ  
いました。」

「きみ、どいて くれた  
まえ。」  
と、一ひきの やぎが  
いいました。  
「いやだよ。 きみこそ  
どいて くれたまえ。」  
と、べつの やぎが い



こたね



いました。

やぎと やぎと、せまい はしの 上で、つのおを おし  
あって いました。

そのうちに、二ひきとも、どぶんと おちて しまいま  
した。



(三)

すみこさんのの した おはなし。

「十二ひきの ぶたが、そろって 川を わたりました。

あさい ところを わたりました。

きを つけて わたりましたから、みんな むこうの

きしに つきました。

きしに あがってから、かず

を かぞえて みました。

一ばん はじめに、ぶうちゃ

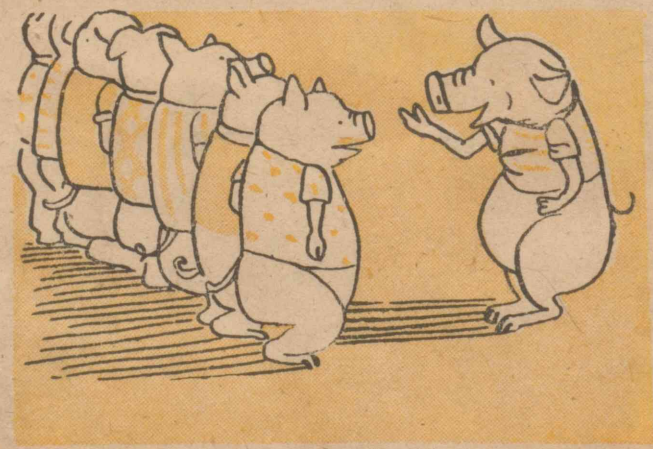
んが かぞえました。

「一ひき、二ひき、三ひき、

四ひき、五ひき、六ひき、

七ひき、八ひき、九ひき、

十ひき、十一ひき—— おや、十一ひきしか いない。





「一匹き たりない。」

ふうちゃんは しんぱいして、もう 一ど かぞえて  
みました。

「一匹き、二匹き、三匹き、四匹き、五匹き、六匹き、  
七匹き、八匹き、九匹き、十匹き、十一匹き。」

やっぱり 十一匹きしか いません。

「おかしいな。みんな わたったはずなのに、どう  
したのだろう。」

「それでは、わたしが かぞえて みよう。」

どんちゃんが かぞえて みました。

やっぱり 十一匹きしか いません。

「こんどは、ぼくが かぞえて みよう。」

ころちゃんが かぞえて みました。

けれども、やっぱり 一匹き たりません。

十二匹きの ぶたは、ふうふう といって さわぎたてま  
した。

「一匹き たりない。」

「一匹き たりない。」

と といって、大さわぎを しました。





(四)

くにおさんのした おはなし。

「ある ところに、六人の めくらが ありま  
した。そのうちの ひとりが、

「みんなは、そうと いう ものを みた ことが あ  
るか」

と いました。

「わたしたちは めくらだもの、みる ことなんか だ  
きないよ。」

と、ほかの ものが いました。

「いや、目で みなくても、手で さわった ことが  
あるかい。」

と、また たずねました。

すると みんなは、

「いや、まだ、さわって みた ことも ない。」

と いました。

こんな はなしを して いると、どしんどしんと い  
う おとが して きました。

「めくらさん、めくらさん。ちょっと そこを どいて  
ください。ぞうが おりますから。」



と、ぞうつかいが いました。

「もしもし、ちよつと その ぞうと いう ものに、  
さわらせて くれませんか。」

「おねがいです。」

と、六人の めくらが、ぞうつかいに たのみました。  
ぞうつかいは、

「じゃあ、さわって ござらん。」

と 言って、ぞうを とめました。

六人の めくらたちは、おそろおそろ ぞうの そばに  
よって きました。

はじめの めくらは、ぞうの おなかを なでて、こう  
いいました。

「ははあ、ぞうは かべと おなじだ。」

二ばんめの めくらは、ぞうの きばに さわって、こ  
う いました。

「ちがうよ。つるつるして、どがったものじゃ ないか。」  
三人めの めくらは、ぞうの はなに さわって、

「ぞうは、大きな へびみたいな 物のさ。」  
と いました。

四人めの めくらは、耳に さわって、



「ぞうは、大きな うちわに いて いるよ。」  
と いいました。

五人めの めくらは、足を なでて、

「ぞうは、木の みきと おなじじゃ ないか。」  
と いいました。

おしまいの めくらは、しっ、

ぽを もって いいました。

「みんな 大ちがいた。ぞう、

は、なわそっくりだ。」

めくらが、ひとりびとり かつ、

てな ことを いうので、ぞうつかいは、わらいながら  
いって しまいました。」

(五)

たけこさんの した おはなし。

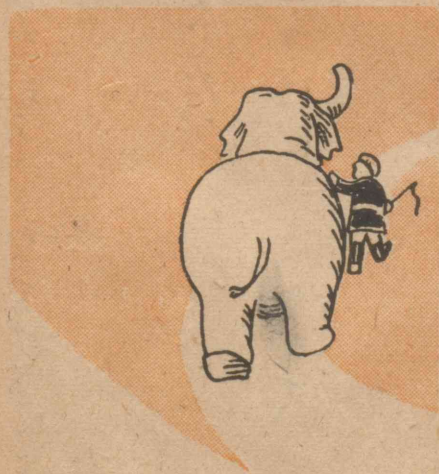
「きのう、学校から かえる とき、くにぎかいの 山に、  
ゆきが ふって いるのを みつけました。」

「大きむ 小さむ。」

山から 小ぞうが とんで きた。」

と うたいながら、かえって いきました。

空は ほんとうに 青い 色でした。





六山びこ

てる人。

たろう。

おとうさん

山びこ(声ばかり)

ところ

山の中



たろうとおとうさんが、

山へのぼって きます。

たろう「おとうさん、ここは、

ずいぶん 高いね。」

おとうさん「よく ここまで のぼった。すこし 休もうか。」

たろう「ええ、休みましょう。」

たろうは、あせを ふき

たろうは、あせを ふき

たろうは、あせを ふき





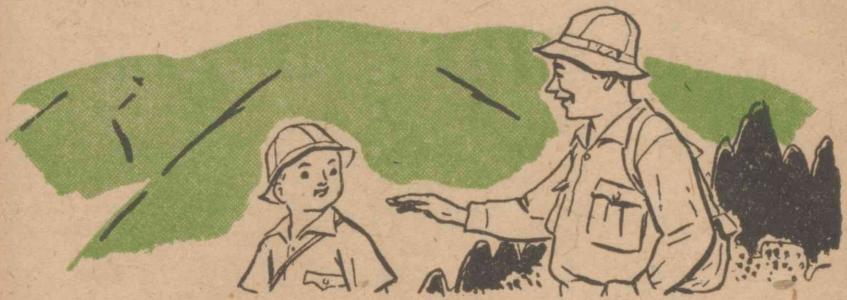
ながら、あたりの けしきをながめます。  
どこかで、かつこうが、「かつこう、かつこう」と なきます。  
すると、とおくの ほうでも、「かつこう」と なきます。  
たろうが、大きな 声で、「おうい、おうい」と さげびます。  
すると、むこうの ほうで、  
で、「おうい」と さげびま  
す。

たろう 「おうい。」  
山びこ 「おうい。」  
たろう 「だれだあい。」



山びこ 「だれだあい。」  
たろう 「ぼく、たろうだよ。」  
山びこ 「たろうだよ。」  
たろう 「ぼくが たろうだよ。」  
山びこ 「たろうだよ。」  
たろう 「うそ つくな。」  
山びこ 「うそ つくな。」  
たろう 「ばか。」  
山びこ 「ばか。」  
おとうさん 「これ、これ、たろう。そんな きたない ことばを





つかう ものでは ないよ。」

たろう 「だって、だれかが ばかに するんだもの。」

おとうさん 「おまえが ロギたなく いうからだよ。おまえが きれいな ことばで いえば あちらだって きれいに いうさ。」

たろう 「ほんとう、おとうさん。」

おとうさん 「ほんとうだとも。いって ごらん。」

たろう 「ごめんね。」

山びこ 「ごめんね。」

たろう 「ぼくが わるかったよう。」

山びこ 「わるかったよう。」

おとうさん 「ほら、ちゃんと あやまるだろ。」

たろう 「おとうさんの おっしゃる とおりですね。」

おとうさん 「さあ、もう すこしのぼろ。」

たろう 「のぼろ。」

たろうは げんきよく あるきだします。かっこうが、とおくで しずかに なきます。





七かげえ

(二)

「おじさん、こんやもまた、かげえ  
をして、みせてください。」

「よろしい、ではやりますよ。」

「さあ、いぬだよ。」

「わん、わん、わん。」

「こんどはきつね。」

「こんこん　こんこん。」

「これはとび。くちばしを　ごらん。」

「はやく、せんどうさんを　みせて　ください。」

「はい、これは　せんどうさん。長い　竹の　さおで、ふ  
ねを　こぎます。」

「おじさん、こんどは、わたくしが　やって　みましよう  
か。」

「ほう、なにを　やるかな。」

「これは　なんですか。」

「さあ、なんだろう。手の　上に　ごむまりを　のせて



いるね。」

「そうです。」

「ふうせんかな。」

「ちがいます。」

「ちきゅうだろう。」

「いいえ、これは、お月さまが、く」

もから でて くる ところ です。」

(三)

でる 入 いちろう

じろう

いもうとの さちこ

おかあさん

ところ へやの中

一の ばめん

いちろうが でて きます。

「この おいしそうな りんご。」

手に 大きな りんごを

もって います。うれしそ





うに、その りんごを、高く さしあげたり においを  
かいだり します。それから、となりの へやへ いこ  
うと して、きゅうに たちどまります。  
うしろを ふりかえって 手まねきを します。

二の ばめん

そこへ、じろうが でて きます。

「いさん、なあに。」

いちろうは、りんごを だして、じろうの 手に わた  
します。

「いさん、ありがとう。」

いちろうは、となりの へやへ いきます。

三の ばめん

じろうは、よろこんで、  
りんごを もって とび  
まわります。

上に なげては うけ

うけては 上に なげて、よろこびます。

それから、じろうは、りんごを たべようと します。



けれども、それを やめて、しばらく かんがえます。  
うしろを ふりかえって、手まねきを します。

四の ばめん

さちこが、走って でて きます。

「いいさん、なあに。」

じろうは、大きな りんごを さちこに わたします。

「まあ、きれいな りんご。」

「あげよう。」

じろうも、となりの へやへ 行って しまいます。

五の ばめん

さちこは、りんごを だいたり、ほお

につけたり、おどったり します。

きゅうに おどりを やめて、しずか

になります。

そうして、きゅうに 走って たちさ

ります。

六の ばめん





一ど くらくなり、また あかるく になると、おかあさ  
んが、いすに こしかけて、本を よんで いらっしや  
います。

「おかあさん、どこ。」

と いう、さちこの 声が します。

「ここですよ、さちこさん。」

さちこが、おかあさんの そばに かけよります。

大きな りんごを、おかあさんに あげます。

おかあさんは、本を おいて、りんごを 手に うけと

けれども、また さちこ

に、りんごを かえしま

す。さちこは、また お

かあさんに あげます。

どうとう、おかあさんは、

さちこから りんごを

もらいます。

「この りんご、じろうに

いさんに いただいたの。

こう いう、さちこは、





じろうを 手まねき します。

じろうが、走って でて きます。

「ああ、その りんご、いちろうに いさんから もらった  
のです。」

こう 行って、いちろうを よびます。

いちろうが、走って でて きます。

おかあさんの よこに、三人が 立ちます。おかあさん  
は、三人の あたまを、しずかに なでて やります。

## 八 ゆめと つくえ

### (二)

ゆうべ、ねどこに はいってから、こんな ことを か  
んがえました。

わたくしには、おとうさんも あります。おじいさんも  
あります。けれども、おじいさんの おとうさんは、おい  
てに なりません。いまは おいでに なりませんが、ま  
えには おいでに なったに ちがひ ありません。



それは、どんなか、  
ただただでしょう。

こんなことをか、  
んがえて いる うい

ちに、いつのまに、  
か、ねむって しま

いました。

ゆめに、ひろい の

はらを みました。

なの花が、いちめん

に、さいて いました。

ちようちよも とんで

いました。

わたくしは、「みんな

いいこ」を うたいながら、

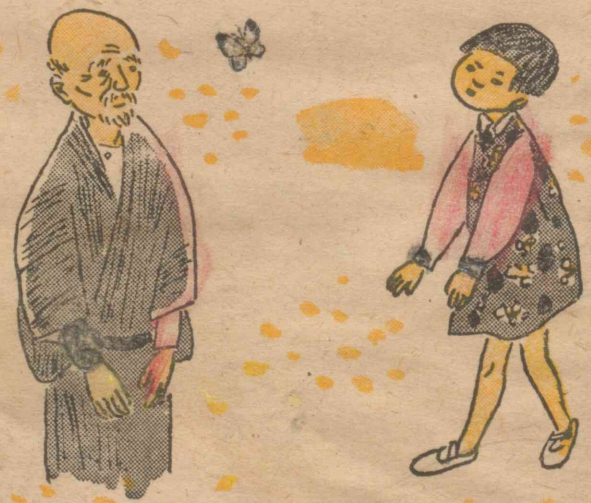
あるいて いきました。

そこへ、ひとりの お

じいさんが でて きま

した。みると、わたくし

のおじいさんに よく





にた かたでした。

わたくしは、おもわず、

「おじいさん。」

と、いいますと、その かたは、

「わたしは、おまえの おじいさんの おとうさんだよ。」

と、いって、にこにこ なさいました。

(三)

先生が、こんな おはなしを なさいました。

「みなさんの つかって いる つくえも、こしかけも、

長い、あいた はたらいて

きました。

二年生も、これで、べんきよ

うを、しました。三年生も、

これで、べんきようしまし

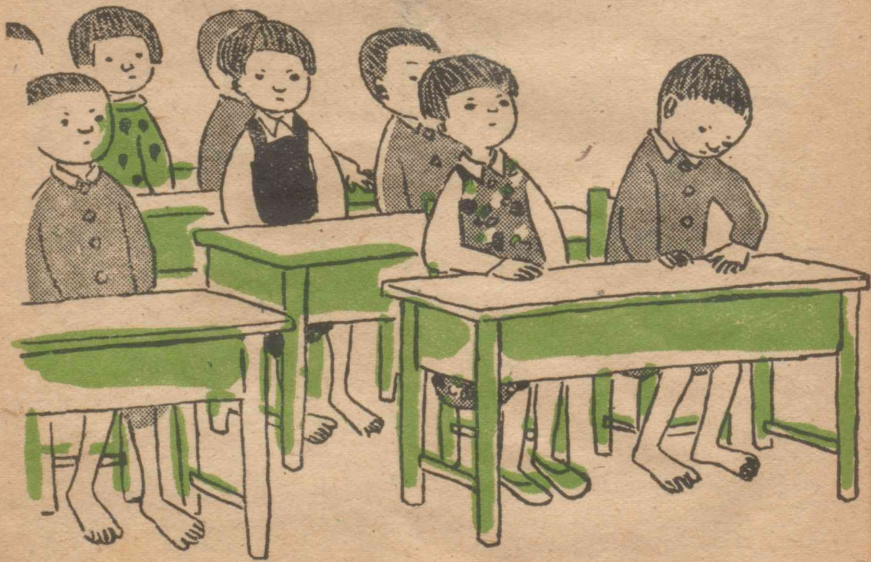
た。

四年の 人たちも、五年の

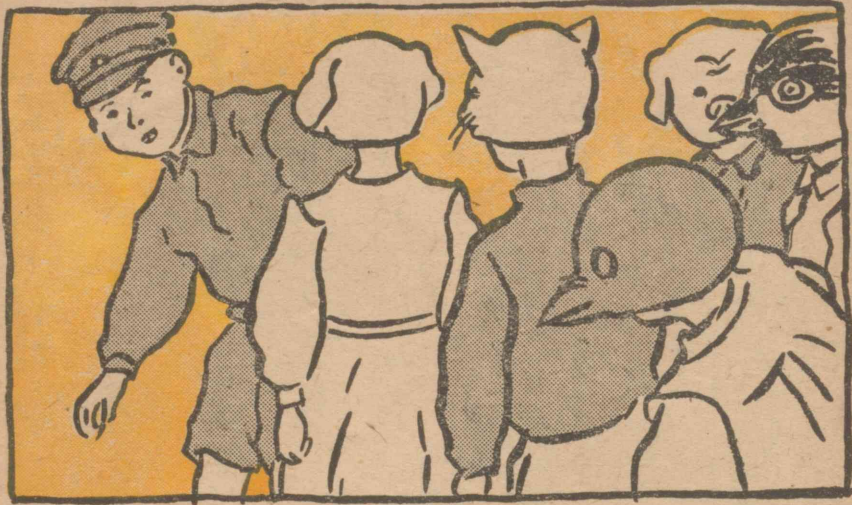
人たちも、六年の 人たち、

も、その まえの 人たち、

も、これを、つかいました。」







ここまで おはなしを きいた とき、わたくしは、ふ  
と、ゆうべの ゆめを おもいだしました。

先生は、つづけて おっしゃいました。

「こんど、みなさんが 二年生に なったら、あたらしい  
一年生が はいって きます。そうして、これを つか  
いますよ。ですから、この つくえや こしかけを、か  
わいがって やりましようね。」

九 春を むかえに

これは よびかけです。みんなで  
かんがえて、やりましよう。

(一)

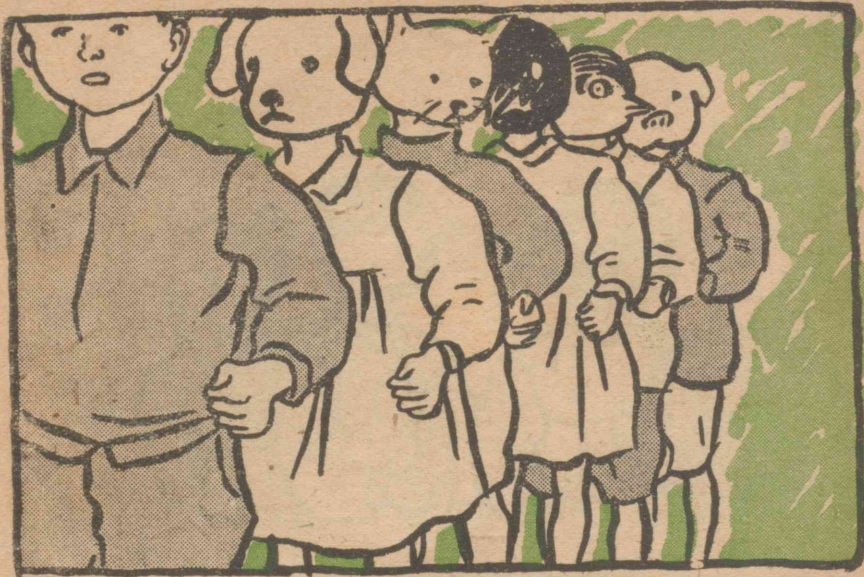
しや「さあ、春を むかえに だ

かけましよう。」

みんな「でかけましよう。」

しや「みんな のりましたか。」





みんな「のりしました。」

しよや「ぼちさんは のりしましたか。」

ぼち「わんわん、わんわん。」

しよや「みけちゃんは。」

みけ「にゃお、にゃお、にゃお。」

しよや「からすさんは。」

からす「かあかあ、かあかあ。」

しよや「すずめさんは。」

すずめ「ちゅんちゅん、ちゅんちゅん。」

しよや「それから、ぶうちゃんは。」

ぶた「ぶうぶう、ぶうぶう。」

しよや「みんな、そろいましたね。」

みんな「そろいました。」

しよや「では、しゅっぱつ。」

みんな「しゅっぱつ。しゅっぱつ。」

しよや「ぽぽう、ぽぽう。」

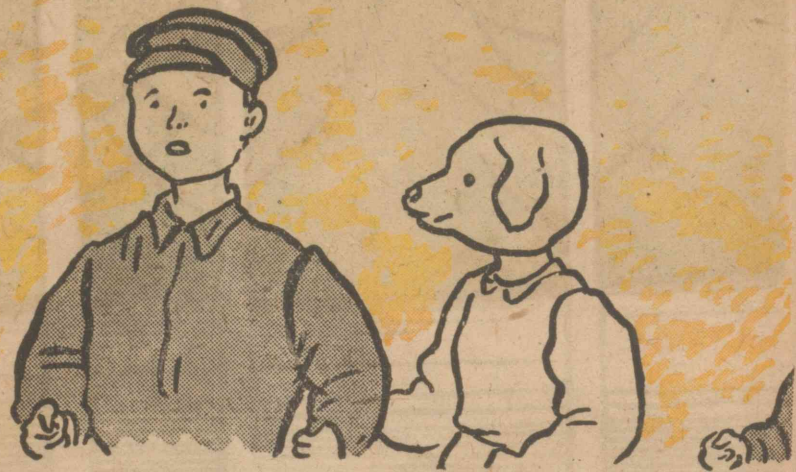
みんな「しゅう、しゅう、しゅう、しゅう、

しゅう、しゅ、しゅ、しゅ、しゅ、

しゅ、しゅ、しゅ、しゅ、しゅ、

しゅ、しゅ、しゅ、しゅ。」





だんだん はやく なる。  
 りょううてを 車のように う  
 ごかす。

(三)

ぶた 「だんだん はやく なる。」

みんな 「はやく なる。」

すずめ 「もう、『冬の 國』も すぎて

いく。」

みんな 「すぎて いく。」

からす 「あたたかい かぜが ふい  
 て くる。」

みんな 「ふいて くる、あたたかい  
 かぜ。」

しょう 「ぼう、ぼう。」

みんな 「しゅしゅしゅしゅ……」

ほち 「空が あかるく なって  
 きた。」

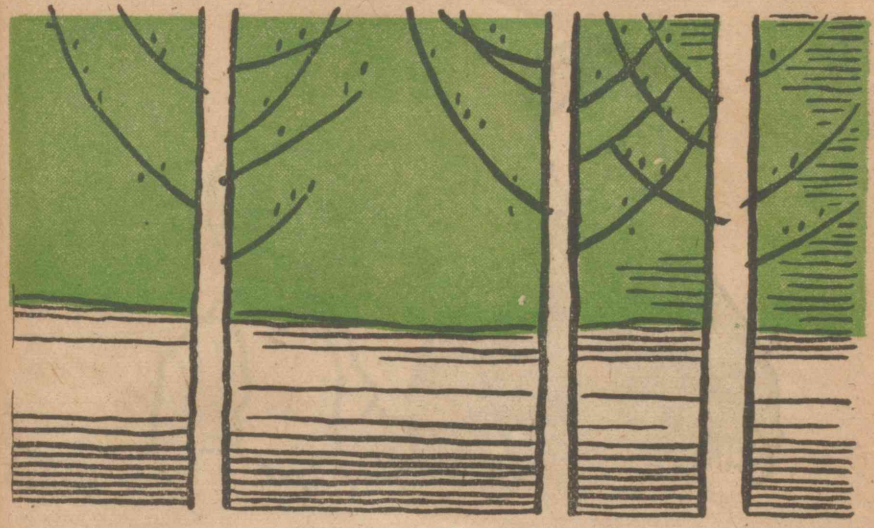
みんな 「あかるく なって きた。」

みけ 「やあ、かすみか たなびい」



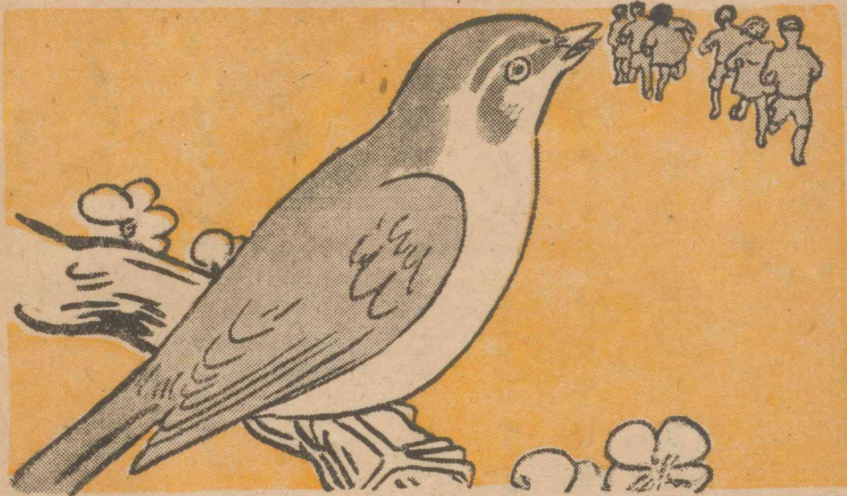


みんな「ひばりさんだ。」  
 ぶた「おや、ひばりさんだ。」  
 びいびい  
 びいちく、びいちく、びいびい  
 びいびい  
 という声でする。  
 そのとき、かげのほうで、  
 「ひいちく、びいちく、びいびい」  
 春をさがす。  
 しゅしゅを つづけながら、  
 みんなは、小さな声で、「しゅしゅ」  
 るよ。



みんな「たなびいて いる、きれいな  
 ながすみ。」  
 しゃ「ちよっと ちよっと、しず  
 かに。」  
 みんなは、「しゅしゅしゅしゅを、  
 きゆうに しずかに いう。けれ  
 ども、うごかす はやさにかわ  
 りはない。  
 しゃ「どこかで、春の 声が す  
 るよ。」





しゃ「そうだ。はやくいこう。」  
 みんな「はやく、はやく。」  
 「しゅしゅしゅしゅを、いつそう  
 げんきよくいう。  
 しゃ「きこえる、きこえる。しずかに  
 にして。もっとしずかに。」  
 みんな、きき耳をたてる。  
 「しゅしゅしゅしゅはひくく  
 つづいている。

しゃ「たしかに春の音がきこえる。」  
 そのとき、かげのほうで、  
 「ほう、ほけきよ。」  
 「ほう、ほけきよ。」  
 となく、  
 すずめ「まあ、うぐいすさんよ。」  
 みんな「うぐいすさん、うぐいすさー

(三)





あん。

しや「もうじき「春の國」だ。」

みんな「よんでみよう。」

しや「春の國」さあん。「春の國」さあん。

すこし たって、かげのほうで、

「はあい、ここですよう。」

「はやくいらっしゃあい。」

と、いう声がある。この声はひとりではなく、大

ぜいの声。

しや「さあ、ぜんそくりよくだ。」

みんな「ぜんそくりよく。」

「ぼほう。」「しゅしゅしゅしゅ。」「ぼほう。」「しゅしゅしゅしゅ。」

いきおいよく走る。きもち。それがだんだんととお

くになるように、小さくする。



こくご二 第一學年後期用  
 Approved by Ministry of Education  
 (Date Sep. 30, 1947)

昭和二十二年九月三十日 總刻印刷  
 昭和二十二年十月十日 日刻發行  
 (昭和二十二年九月三十日 文部省檢査済)

著作權所有

著作兼發行者

文

部

省

總刻發行  
 東京都北區堀船町一丁目八五七番地  
 東京書籍株式會社

代表者 井上源之丞

印刷所  
 東京都北區堀船町一丁目八五七番地  
 東京書籍株式會社

發行所  
 東京都北區堀船町一丁目八五七番地  
 東京書籍株式會社

立 (54)      高 (39)      耳 (35)      青 (14)      友 (5)

年 (59)      休 (39)      学 (37)      上 (18)      先 (9)

春 (61)      長 (45)      校 (37)      下 (18)      生 (9)

車 (64)      竹 (45)      空 (37)      花 (23)      小 (11)

冬 (64) <sup>ゆき</sup>      走 (50)      色 (37)      水 (24)      大 (13)

國 (64)      本 (52)      声 (38)      中 (26)      赤 (14)



